Title	定家と長明：『定家卿自歌合』の真偽に及ぶ
Sub Title	Fujiwara no Teika and Kamo no Chomei : in reference to the question of authenticity of "Teikakyo Jika-Awase (Teika's Personal Poetry Match)"
Author	小林, 一彦(Kobayashi, Kazuhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.69, (1995. 12) ,p.1- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00690001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

定家と長明

——『定家卿自歌合』の真偽に及ぶ——

小林 一彦

一

建仁元年七月二十六日、後鳥羽院は上古の先例に倣い和歌所を設置した。召し出された寄人は、良経・通親・慈円・俊成・通具・有家・定家・家隆・雅経・具親・寂蓮の十一人⁽¹⁾で、後に隆信・秀能・長明の三人が加えられた。事務局にあたる開闔は家長が務めたが、彼の著した『家長日記』は、寄人の中でも長明の精勤ぶりを「まかりいづることもなく、よるひる奉公おこたらず⁽²⁾」と特筆している。この長明の目に、和歌所の寄人たちがどのように映じていたかは、些か興味をそそられる問題である。『新古今集』撰進の母胎となった後鳥羽院歌壇において、枢要な位置を占めていた寄人たちは、大小の歌会や歌合などの歌席もさることながら、日頃も和歌所にて互いに顔を合わせる機会が多く存したのであろうことは想像に難くない。長明は、歌論書・歌学書としての性格を併せ持ち、総体としては和歌随筆とも呼ぶべきユニークな書『無名抄』を遺している。久保田淳氏が「われわれはこのかならずしも長いとはいえない書物の中に、さまざま

まな歌人のいきいきとした相貌を垣間見ることができるとおり、『無名抄』は、長明が各々の寄人に對して抱いていた思いを窺い知る上できわめて有用な窓とならう。稿者は、こうした観点に立ち、先に長明と寂蓮について試みに論じたことがあつた。⁽⁴⁾ その結果、長明と寂蓮とが近い関係にあつたことが確かめられた。長明は寂蓮を先達として尊敬し、強い親近感を抱いていたと言つてもよい。

では、定家の場合は如何であらうか。定家と長明とはお互いをはたしてどのように見ていたのか、寂蓮の場合と異なり定家の側にも多くの資料が遺されているが、まずは『無名抄』をもとに両者の間柄を探つてみたい。

『無名抄』に、定家は三度登場する。すなわち「榎葉井事」〔会歌姿分事〕そして「故実の体と云事」である。⁽⁵⁾ このうち「会歌姿分事」は「正しく其座に連なれる人、殿下・大僧正御坊・定家・家隆・寂蓮・子と、僅かに六人ぞ侍し」という三体和歌の参加者紹介を記した箇所が登場するのみである。残りの二つの章段については、「故実の体と云事」そして「榎葉井事」という順番で、やや詳しく見ていくことにしたい。

〔故実の体と云事〕

（前略）一には、古歌を取る事。又やうあり。（中略）又、御所の御歌合に暁鹿をよみ侍し時、
今来んと妻や契りし長月の有明の月にを鹿鳴くなり

此歌は、「ことがら優し」とて勝ちにき。されど、定家朝臣当座にて難ぜられき。素性〔が〕歌に僅かに二句こそ変りて侍れ、かやうに多く似たる歌は其句を置きかへて、上句を下になしなど作り改めたるこそよけれ。是はたゞ本の置所にて、胸の句と結び句とはかり変れるは難とすべし」となん侍し。

『井蛙抄』は、卷第二「取二本歌一事」の「本歌詞取過事」の項で、「鴨長明抄云…」としてこの部分を真つ先に引いて

いる。定家の発言は、『毎月抄』の「本歌の詞をあまりに多く取る事はあるまじきにて候。そのやうは、詮とおぼゆる詞二つばかりにて、今の歌の上下句にわかち置くべきにや」⁽⁶⁾、『詠歌大概』の「五句之中及三句一者頗過分無珍氣」⁽⁶⁾という記載内容とも合致しており、長明は事実をほぼありのままに記していると認めてよいであろう。「近代歌体事」の章段には「御所の御会につかうまつりしには、ふつと思ひも寄らぬ事のみ人毎によまれしかば、この道ははやく期もなく、際もなき事に成りにけりと、恐しくこそ覚え侍しか」という記述が見出せる。後鳥羽院の仙洞御所の歌席に連なつた長明は、そこで詠じられる歌々が自分のこれまで学び詠じてきた歌とはまったく異質で思いもよらないものであつたことに驚愕したと告白している。長明は、そうした御所辺へ俊成が領導していた歌壇へ伺候する新風歌人の代表として定家を見ていたのではないか。この話は本歌取をめぐつての長明の感慨であるが、それはほんの一面であり、問題は本歌取の技法一つにとどまらなかつたに違いない。

〔榎葉井事〕

或人云、「宮内卿有賢朝臣、時の殿上人七、八人相伴ひて、大和国葛城の方へ遊びに行かれたる事ありけり。其時、或所に、荒れたる堂の大きにやうくしきが見えければ、怪しくて、其名を逢ふ人毎に問ひけれども、知れる人もなかりけり。かゝる間に、ことの外に鬢白き翁ひとり見えけり。是はしも様あらんとて尋ねければ、『是をば豊等の寺とぞ申す』と云ふ。人々、『いみじき事也』と返々感じて、『さるにては、もし此辺に榎葉井と云ふ井やある』と問ふ。『皆あせて水も侍らねど、跡は今に侍る』とて、堂より西いくほど去らぬ程に行きて教へければ、人々興に入りて、やがてそこに群れ居て、葛城と云ふ歌數十返歌ひて、この翁に衣ども脱ぎてかづけたりければ、覚えぬ事に遭ひて悦び畏まりて去りける』とぞ。

近くは、土御門内大臣家に毎月影供せらるゝことの侍し比、忍びて御幸などなる時も侍き。

其会に、古寺月といふ題によみて奉りし、

古りにける豊等の寺の榎葉井になを白玉を残す月影

五条三位入道是を聞きて、「優しくもつかうまつれる哉。入道がしかるべからん時取り出んと思ふ給へ(つ)る事を、かなしくも先ぜられたり」とて頻りに感ぜられ侍き。此事催馬楽の詞なれば、誰も知りたれど、是より先には歌によめる事見えず。其後こそ冷泉中将定家の歌によまれて侍しか。

前半部分は、大和国に出かけた源有賢らが、豊等寺と榎葉井とを偶然に確かめ、興にのつて催馬楽の「葛城」を数十返歌ったという「或人」の話、後半部分は長明の自讃話となっている。これによれば、俊成は催馬楽の「葛城」をいつか自詠に取り込み気の利いた一首に仕立てようと目論でいたらしい。催馬楽「葛城」とは、次のようなものであった。

葛城の 寺の前なるや 豊浦の寺の 西なるや 榎の葉井に 白玉沈くや 真白玉沈くや おおしとど おしとど
しかしてば 国ぞ栄えむや 我家らぞ 富せむや おおしとど としとんど おおしとんど としとんど⁽⁷⁾

長明は、『無名抄』を通して見る限り、定家に一目置いていたことは疑いない。先に引いた(会歌姿分事)の「心にくからぬ人をば(又) 自元召されず。かゝらば正しく其座に連なれる人」という三体和歌の詠進者を紹介するくだりからは、自分もその「心にくからぬ」歌人の一人なのだという長明の矜恃をつぶさに見て取ることができ、見逃してならないのは、「殿下(良経)・大僧正御坊(慈円)・定家・家隆・寂蓮」という名を仰々しく列記し、そうした秀抜な歌人の中に自身を定位させるといふ方法を長明が採っている点である。「榎葉井事」においても同様で、後半の自讃話は、俊成と定家といういわば誰しもが認める権威を用いることで、自身の功名をいっそう強調しようという意図がありあり

と見て取れる。長明が定家を優れた歌人として見ていたことは間違いないが、『無名抄』の筆致を見る限り、世間から優れた歌人と見られている定家をより強く意識していたと言うべきかも知れない。

二

では、定家は長明のことをどう見ていたのであろうか。いくつかの資料を用いて両者の関係を定家側から逆射照してみたい。

『明月記』に長明は五度登場する。時日を列記すれば建仁元年三月十六日、同二年一月十三日、三月二十二日、同三年二月二十四日・二十五日である。長明が定家の視界に入っていた時期は、彼が後鳥羽院歌壇に参加していたわずかの期間に限られることは、押さえておく必要がある。建仁元年三月十六日は通親邸影供歌合が行われた。講師を命じられた定家は、『明月記』にその夜の出詠歌人の読み様を書き留めている。長明には「雖五位、其身凡卑、仍准六位讀之」という割注が施されているが、この「凡卑」は「地下」とほぼ同義で用いられたものと思われ、特に長明のことを「身分が低く卑しい」と感じていたわけではなからう。建仁二年一月十三日には和歌所御会、三月二十二日には高名な三体和歌が催されている。建仁三年二月二十四日は和歌所などの面々と私的に大内の花見をし、和歌・連歌に興じた記録で、翌二十五日は前日の花見に風流心を刺激された院が大内へ御幸、観桜の傍ら歌会を催されたことを伝えるものである。その都度定家は『明月記』に参加歌人やその場に居合わせた人物の名を丹念に書き留めているが、いずれも長明はそのうちの一人にしか過ぎず、両者に親密な交流があったとは思われない。二十四日の和歌所の仲間たちとの花見も、いったん帰宅していた定家を迎えにきたのは雅経と具親であった。

もとより『明月記』はそのすべてが現存しているわけではなく、散佚してしまった部分に、長明に対する定家の心情があらのままに吐露された箇所がなかったとは言い切れない。しかしながら、現存『明月記』の記述からは、長明に関し、いわば人間定家の肉声とでも言うべきものは感じられない。定家にとって長明とは、視界には入っているものの、自らの意志で焦点を合わせるほどの対象ではなかったと言えようか。

『新古今集』に長明の歌は十首採られているが、このうち定家の撰者名注記(8)を持つものは秋上・三九七番歌、四〇一番歌、雑下・一七七八番歌の三首である。

このうち三九七番歌は「八月十五夜和歌所歌合に」(月前風) 鴨長明 ながむればちちに物おもふ月に又我が身ひとつのみねの松かぜ」で、「通・有・定・隆・雅」と撰者のすべてが票を投じている一首である。『耕雲口伝』では「本歌取様の事」で定家の「おほ空はむめのにほひにかすみつつくもりもはてぬ春のよの月」(春上・四二)とともに「此両首は其季をかへずして、殊に幽微(9)ふかし」と並び称されており、新古今歌風を代表する佳品といってもよい。また、一七七八番歌は「身のぞみかなひ侍らで、やしろのまじらひもせで、こもりゐて侍りけるに、葵をみてよめる 鴨長明 見ればまづいとど涙ぞもろかづらひかに契りてかけはなれけむ」というもので、「有・定・隆・雅」の四人が撰んでいる。長明は後鳥羽院の叡慮により鴨御祖神社の撰社である河合社の禰宜職にいったんは就きかけたが、同族祐兼の妨害に合(10)い、望みは水泡に帰していた。この歌が直接そのことに関わるものかどうか、なお慎重を要するが、和歌所寄人である四人には、撰歌にあたり河合社の一件をよく知る者として長明に対するいくばくかの同情心が働いていたかも知れない。いずれにせよ、定家が、長明の歌を少なくとも三首、推していたことは確かである。

しかし、その後、定家の長明に対する感情はかなり変化してゆくようである。長明の八代集への入集歌数は『千載集』

の一首とあわせ十一首であるが、定家撰の『定家八代抄』には長明の歌は一首も見出せない。また単独で撰者を務めた『新勅撰集』にも、意外なことに定家は長明の歌を一首も採っていないのである。後鳥羽院が召した和歌所寄人十四人のうち、同集に名前が見えないのは長明ただ一人というのも些か気になる。『新勅撰集』では、定家は自身と私的に交流のあつた歌人たちの作をかなり意識的に並び入れており、それが同集の特色の一つともなっているのだが、一首も詠歌が存しないという事実は、そうした関係が定家と長明との間には成立していなかったことをあらためて物語っていると言えよう。さらには『新勅撰集』にとどまらず、為家の撰になる『続後撰集』においても、長明の歌は一首も採歌されていないのである。定家から為家へと、長明に関して語り伝えられた何かが存在したのではないかと勘繰りたくなるほどである。長明は『統歌仙落書』『新三十六人撰』『新時代不同歌合』などに歌仙として数えられるほどの歌人であったが、周知のように定家撰と考えられる『百人一首』にはその名が見えない。どうやら定家の内部では、歌人としての長明の評価は決して高いものではなかったらしい。そして特に晩年へと向かうにつれ、そうした傾向はより顕著になっていくように見受けられる。あるいは定家は、寄人時代に見せたような、いわば可もなし不可もなしとでも言うべき、ある程度距離をおいた接し方から、人間長明というよりむしろ歌人長明を、次第に遠ざけ拒絶するように心を変じていったのではないかと思われるのである。

二二

『定家卿自歌合』という作品が伝存している。自撰の『定家卿百番自歌合』と紛らわしい書名であるが、こちらは二十四番、四十八首から成る歌合で、おそらくは偽作・偽書であろうと定家真作を疑われている作品である。この『定家卿

自歌合』には、次のような序文がついている。

予少年の昔より暮齡の今にいたるまで、前後詠ずる所の和歌つもりて箱の内のみてり。しかれども口業の因縁となりて、更身後の資糧にあらず。因茲いま聊滅罪生善のはかり事をめぐらさむがために、愚詠の中より四十八首の歌を抜き出て一巻の歌合とす。其形を画図にうつして左右にわかづ。道俗ことなりといへども、愚身これひとつなり。歌の数四十八に定むる事は、かの弥陀の本願になずらへて、撰取不捨のちかひなどたのむ故なり。子孫のためにして是をしるす、外人のためにこれなどしるさず。ながき世のかたみに用ひて、反古にしよする事なかれと云事しかり⁽¹⁰⁾『定家卿自歌合』については、『群書解題』にやや詳しい論及がある。同解題は樋口芳麻呂氏の執筆になるが、氏が「定家の自歌合かどうかはなほ疑わしい」とされる論拠は次の二点に集約される。

1、序の後半で「子孫のためにして是をしるす、外人のためにこれなどしるさず。ながき世のかたみに用ひて、反古にしよする事なかれと云事しかり」と述べているのは、謙退の辞を用い、極めて慎重な書きざまを常とする定家には、ふさわしからぬ表現である。

2、「愚詠の中より四十八首の歌を抜き出て一巻の歌合とす」と記すにもかかわらず、定家の家集は勿論、勅撰集・私撰集などにも、一首として本歌合の歌は見出されない。

樋口氏は『和歌大辞典』の「定家卿自歌合」の項目でも「藤原定家の撰とするが、定家の歌と合致するものがなく、定家仮託の偽書か」とやはり真作を疑っておられる。このほか『日本古典文学大辞典』は「藤原定家」の項で「現在の和歌作品は計約四千六十首余り。その他『鷹三百首』（群書類従・鷹所収）、『定家卿自歌合』（群書類従・和歌所収）、『定家卿八景和歌』（元禄四年（一六九一）刊）『鳴の羽搔』所収）などが彼の作と伝えられるが、偽作と考えられる」（久保

田淳氏執筆」と記しており、おしなべて真作とする見方に否定的である。

この問題については、早く冷泉為臣氏が『藤原定家全歌集』において、「確証のない今日は、先づ疑ふべきものである」と言及、『定家卿自歌合』を『鷹三百五十一首』『八景和歌』などとともに「拾遺愚草員外之外」の「存疑篇」に部類された。久保田淳氏『訳注藤原定家全歌集』もほぼこれを踏襲し、やはり「存疑篇」に収載している⁽¹⁾。

確かに現時点では、『定家卿自歌合』中の四十八首の和歌のうち定家の作と確認されるものは皆無である。同自歌合は偽書、収載された和歌はすべて偽作ではないか、と疑われる最大の理由がここにある。

さて、『無名抄』(『榎葉井事』)の章段についてはすでに触れた。榎葉井を詠じた作は、長明の歌以前には見出せず、彼の作品が初見であることはほぼ確かである。しかし、それ以後、管見では榎葉井の作例は兼良の一首(南都百首・八一)のみであり、長明の歌が和歌史の中で孤立している印象は免れない。長明が誇らしげに記したにもかかわらず、実際に榎葉井が歌人たちの注目を惹き、詠作されることはほとんどなかったことになる。一方、豊等寺の詠作例は、はやく二条太皇太后宮大弑集』(二五七)と『重家集』(三三二)に見出せ、必ずしも長明が最初ではない。けれども、長明以後、ただちに受容された見え、家隆(夫木抄・一六四五八)、行意(建保名所百首・六二)、後鳥羽院下野(寛喜四年石清水若宮歌合・四二)、土御門院(土御門院御集・三九二)、行家(夫木抄・一六四六〇)、具氏(続古今集・四七九)らに詠作が存し、それ以後もかなりの作例が詠まれるに至る。特に、以後しばしば散見される豊等寺と月との取り合わせは、長明に始源を發するものと見てよいであろう。

ところで、『無名抄』のなかでも広く知られている(せみのを川の事)の章段には、次のように記されていた。

(前略)その後、この事を聞きて、禰宜祐兼大きに難じて侍りき。「かやうの事は、いみじからん晴の会、もしは国

王・大臣の御前などにてこそよまめ。かゝる藝事によみたる、無念なる事也」と申し侍し程に、隆信朝臣此川をよむ、又顕昭法師、左大將家の百首の歌合の時、是をよむ。祐兼いはく、「さればこそ、それいみじくよみ出したれども、世の末には、いづれか先なりけん、人はいかでか知らん。何となくまぎれてやみぬべかりける」と本意ながら侍しを、新古今撰ばれし時、この歌入れられたり。「いと人も知らぬ事なるを」と申す人などの侍けるにや。すべて此度の集に十首入り侍り。これ過分の面目なる中にも、此歌の入りて侍るが、生死の余執ともなるばかり嬉しく侍るなり。但し、あはれ無益の事かな。

賀茂社の歌合での自詠「石川やせみのを川の清ければ月も流れを尋ねてぞ澄む」が契機となり、歌枕瀬見の小川が注目されるに至り、遅れて隆信と顕昭とが自詠に取り入れたのだと明記しているように、長明はオリジナリティーや先後関係に対し並々ならぬこだわりを見せる歌人であった。祐兼の発言からも窺えるように、こうした傾向は長明一人に限ったことではなく、当時の歌界全体にある程度共通する意識でもあったらしい。長明が初出であると公言していた瀬見の小川は、その素姓が問題となるものの、はやく類従本『順集』の増補歌に見出せることが指摘されている⁽¹²⁾。しかし、ここで問題としたいのは、師光や顕昭の態度である。省略した前段には、判者の師光が「かゝる川やはある」と難じて負判を付したこと、その後顕昭の再判でも「かゝる川などの侍るにや。其所の者に尋ねて定むべし」とされ勝負付が保留されたことがこと細かに記されている。師光や顕昭の視線はひたすら瀬見の小川の実態に向けられており、彼らがその存疑によって歌の優劣を決しようとしていたことは疑いない。一方、(榎葉井事)における俊成は、こうした立場と微妙な食い違いを見せている。「優しくもつかうまつれる哉。入道がしかるべからん時取り出んと思ふ給へ(つ)る事を、かなしくも先ぜられたり」「此事催馬楽の詞なれば、誰も知りたれど、是より先には歌によめる事見えず」と並べてみると、

俊成は、誰もが知っている古典としての催馬楽の詞章を、長明が巧みに活かし一首に捌いた点を評価していたと受け取れる。もとより長明の筆を介しての判断には限界があるものの、俊成の示した態度は、瀬見の小川という歌枕の存疑・実態をことさらに問題とする師光や顕昭らの態度とは異なっているように思われてならない。俊成は榎葉井そのものの実態についてはさほどの関心を示さなかったのではないか。¹³⁾ おそらくは定家も、父同様に素材としての催馬楽「葛城」に少なからぬ関心を抱いていたのであろう。『新勅撰集』には「つつみをばとよらの宮につきそめて世世をへぬれど水はもらさず」（四九一）という貞信公（忠平）の歌が撰入されており、このことは定家が豊等という地名に関心を持っていたことの一つの証左と言えるかも知れない。『無名抄』には「其後こそ冷泉中将定家の歌によまれて侍しか」とあり、長明歌が詠まれた後に、定家が催馬楽の詞章をもとに歌を詠じていたことが知られる。梁瀬一雄氏は『無名抄全講』において「このことを詠んだ定家の歌が、どういふ歌かはつきりしない」と述べておられる。『無名抄』の注釈書は少なくないが、具体的に定家詠を指摘したものを寡聞にして知らない。

ところが、長明が指摘する定家の歌とは、あるいはこの歌のことではなかったか、と思われる詠作が、実は『定家卿自歌合』の作品中に見出せるのである。

かづらきや豊浦の桜咲にけりかすみの西にかゝる白雲

三番左「古寺花」という題とともに配されている一首である。すでに久保田淳氏が『詠注藤原定家全歌集』において御指摘のとおり、この歌が催馬楽「葛城」を本歌として成立していることは明らかである。歌題が「古寺花」であることも、長明歌の「古寺月」と照応しており、両歌の浅からぬ関連が想像される。（せみのを川の事）において長明が指摘した顕昭の歌は『六百番歌合』「祈恋」の「いし川やせみのをがはいぐしたてねぎしあふせは神にまかせつ」（四番左・

六六七)であることは確かである。隆信にも『千五百番歌合』に「いしかはやせみのをがはのながれにもあふせありやとみそぎをぞする」(千二百二十五番左・二四四八)の歌が見出せる。長明の発言どおり、隆信と顕昭に瀬見の小川の歌が確認できることを勘案すれば、「榎葉井事」での長明の発言、すなわち遅れて定家が詠作したとの指摘は、真実と受け取って誤りはないものと思われる。「古寺月」の歌題から、長明歌が披講されたのは正治二年十一月八日の通親邸影供歌合においてであったと考えられ、定家の歌が詠作されたのは、それ以降、「榎葉井事」の章段が書かれるまでの間ということになる。長明は建保四年(一一二六)に没しているので、少なくともそれを下ることはあり得ない。仮に、先に引いた「かづらきや」の歌がこの間に詠作されていたものであったとしても、何等不都合はなく、序の「愚詠の中より四十八首の歌を抜き出て一巻の歌合とす」の記述とも齟齬をきたさないことになる。「其後こそ冷泉中将定家の歌によまれて侍しか」という箇所が長明による嘘言であるとは考えられない。しかしながら、今日、詠歌集成が最も進んでいる歌人の一人であるにもかかわらず、定家の歌の中に、他に該当する詠作が見出せないのも事実である。これまで偽作・偽書と見られてきた『定家卿自歌合』に、定家真作としての可能性が出来てきたということになるのだろうか。

四

『定家卿自歌合』は刊本としての群書類従本以外に五本の写本の存在が知られている。⁽¹⁴⁾ そのうちの一本、寛永二十年の書写になる二松学舎大学附属図書館清文庫蔵本⁽¹⁵⁾では、ちょうど序と歌合本文との間にあたる見開きに「烏帽子狩衣／著たる男／一人」(十二丁裏)、「僧一人」(十二丁表)とやや大振りな文字で墨書されている。流布本である群書類従本には見えない記述であるが、これは序文の「其形を画図にうつして左右にわかつ。道俗ことなりといへども、愚身これ

ひとつなり」という箇所にもましく照応する。すなわち、該本の親本系統には、序文どおりにそれぞれ左側に出家後の、右側に在俗時の定家の姿が描かれていた伝本がかつて確かに存在していたことを物語る有力な証拠と言うことができる。それが書承されていく間にいつしか定家の画像であることが忘れられ、ついには無意味なものとして省略されるに至ったものであろう。事実、流布本である群書類従本にはこの部分がすっかり抜け落ちており、存在しない。「烏帽子狩衣著たる男一人」「僧一人」という竹清文庫の記述は、その中間の段階を伝えるものとして注目される。『定家卿自歌合』が自撰であるとする、定家は自身の道俗二態の姿を描かせていたことになり、些か不自然であると言わざるを得ない。後世、定家の神格化が進み、その画像が勅撰集撰進に際して設置される和歌所に掲げられるようになるが、序文にいう「画図」はそうした定家神格化と揆を一にするものと考えられ、やはり『定家卿自歌合』は偽作であると判断するのが妥当かと思われる。

内容面においても、久保田淳氏は十二番左「山路月」の「ふかき夜の山路の月のおくらずはつらかりぬべき旅の空かな」に対し、「定家が「山路月」という題をそのまま「山路の月」と詠むことは考え難い」と指摘されている⁽¹⁷⁾。また、すでに樋口氏に言及が存するように、序文の内容はやはり定家の真作と考えるには腑に落ちない点が見受けられる。氏が指摘された定家らしい謙退や慎重さが感じられないこともさることながら、特に「子孫のためにして是をしるす、外人のためにこれなどしるさず」という文言からは、「定家に遡る秘籍の伝来をことさらに強調しよう」という姿勢が見て取れ、それが逆に凶らずも仮託書であることを露呈させているように思われるのである。

さて、『無名抄』に「俊成自讃歌事」という章段がある。俊成の許を訪れた俊恵は、その機会に俊成自身の口から自讃の歌を聞き出そうとした。「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」という一首を示した俊成に、世評に名

高い「面影に花の姿を先立て、幾重越え来ぬ峰の白雲」はどうかと俊恵はわざわざ念を押している。俊成の答は「いさ。よそにはさもや定め侍るらん。知り給へず。猶自らは先の歌にはいひ較ぶべくもあらず」という、自信に満ち溢れたものであった。これに対し俊恵は、「彼の歌は、『身にしみて』と云ふ腰の句のいみじ（う）無念に覚ゆるなり。是程に成りぬる歌は、景気をいひ流して、たゞ空に身にしみけんかしと思はせたるこそ、心にくくも優にも侍れ。いみじういひもて行きて、歌の詮とすべきふしをさはといひ現したれば、むげにこと浅く成りぬる」とその欠点を指摘する。ただし、「是程に成りぬる歌」とあることから、俊恵は「夕されば」の歌を全面的に否定していたのではなく、水準を越える作として評価していたことが窺われる。事実（俊恵歌体定事）に続く（故実の体と云事）の章段では、「名所を取るに故実あり」の秀歌例として名所と歌の姿が合致している例を四首挙げるが、そのなかに「物寂しき姿なるにより、深草の里殊にたよりあり」という評とともに「夕されば」の歌が引かれている。（俊恵歌体定事）から（故実の体と云事）にかけての章段の立て方は諸本一定せず、該所も、俊恵の教えそのままではなく長明の実作経験を通してのもの⁽¹⁸⁾と解するか、引き続き俊恵の長明に対する伝授的な教訓⁽¹⁹⁾と取るか、意見の分かれるところではある。しかし、いずれにせよ、「夕されば」の歌に対する長明の評価が、俊恵のそれとほぼ一致したものであったことは十分想像できる。長明は（俊成自讃歌事）の章段を「師の教訓としてこれを受け取り、それを肯定する立場から書きとめた」⁽¹⁹⁾とする梁瀬一雄氏の推定は正しいであろう。俊恵は自ら「み吉野の山かき曇り雪降れば麓の里は打時雨つ、」を撰び、後世混乱が生じた場合、これが自讃歌だと明言するようにと長明に申し伝えていた。俊恵の自讃歌は、望みどおり評価されるに至り『新古今集』（冬・五八八）に入集をみている。さすがに俊恵の自信作だけあって、「通・隆・有・雅」の撰者名注記が示すように撰者間の評価も高い。該歌が俊恵の自讃歌であることは、撰者たちの耳にも達していたのであろう。けれども、ただ一人定家だけが

この歌に点を入れていないことには、やはり注意が払われてよい。定家は後年の『定家八代抄』や『秀歌大体』にも撰んでおらず、その態度は一貫して変わらなかつたのである。⁽²⁰⁾

久保田淳氏は、「一応お互いに立てる態度を保持しつつも、俊成と俊恵の間には、暗々裡に張り合う感情が秘められている」⁽¹⁹⁾ことを指摘された。これは、そのままある程度まで長明と定家の間にも継承されていたのではないか。もとより、俊恵は歌林苑を主宰する重代の歌詠みであつたが、長明はそうではなく、両者の歌壇的位置は俊恵と俊成の場合ほど釣合の取れたものとは言い難い。けれども、お互いに俊恵と俊成の薫陶をうけ、その正統を嗣ぐ者という自負は人一倍強かつたに違ひなく、それぞれが拠り所とする和歌観においては、譲れないものを保持していたのではないだろうか。また、久保田氏は、歌林苑に関わる詠歌が『長秋詠藻』ではそのように明記されておらず、「歌林苑」という文字が抹殺されていることを指摘されてもいる。氏は、俊成のそうした行動の背景には「歌林苑の活動をさして意味あるものと認めようとしない、或評価が行われていると考える」⁽²¹⁾と分析された。おそらく、俊成が歌林苑に対して抱いていた感情と通じる思いを定家も抱いていたのではないか。〔千載集事〕の章段で、同集に一首入集した長明は「させる重代にもあらず、よみ口にもあらず。又時とりて人に許されたる好士にもあらず。しかるを一首にても入れるはいみじき面目なり」と喜悅している。ここには長明が歌詠みの条件として三つのものを考えていたことが露呈されている。重代、よみ口、好士の三つである。長明はそのいずれにも該当しないと自身を分析しているが、重代とよみ口は言下に否定しながら、好士にだけは「時とりて人に許されたる」という修飾語を付している。裏返せば、筋がね入りの好士とはいかないまでも、それ相応には好士であると主張しているのと同じことで、多分に謙遜の意味を込めつつも、そこには好士の系列に位置しているとの自負が覗いている。代々歌人を輩出する家柄に生まれたわけでもなく、すぐれた歌を読む才能に恵ま

れてもいない、歌人として立つていくにはただ好士であること以外に道はないと長明は感じていたのである。一方、定家は好士であることにそれほどの価値を認めてはいない。俊成や定家が目指したものが王朝の典雅な宮廷和歌の復活であつたとすれば、好士の要素はむしろ排除されるべきものであつたことになる。

長明は建保四年（一一二六）閏六月八日に六十二歳で没している。したがって『無名抄』はそれ以前に出来上がつていなければならぬ。歌人の逸話を多く収載し、歌道随筆・和歌随筆とでもいふべき同書の性格から推して、内容についての様々な雑音が好むと好まざるとに関わらず、当時斯界の第一人者であつた定家の耳に届いてきたことであろう。あるいは〔無名大将事〕〔榎葉井事〕〔俊成自讃歌事〕など、俊成や定家自身に関わる逸話の真偽を、直接定家に尋ねて確かめようとする者もいたかも知れない。定家が『無名抄』の内容に無関心で、周囲の雑音に対してもまったく没交渉であり続けることは、やはり難しかったのではないか。

秘事や故事をことさら秘蔵する歌林苑の姿勢とは一線を画しながらも、催馬楽などの古い詞を用いて、そこに新しい心を吹き込み、秀歌を詠み出そうとする積極的な姿勢は、俊成・定家の父子に共通して流れていたに違いない。定家は、そうした自らの詠歌観に忠実に、催馬楽「葛城」をもとに歌を詠じたのではないか。長明の脳裏には、通親亭影供歌合での俊成の賛辞が意識の底にあたかも伏流水のように流れていたことは間違いない。定家の歌を目にした彼は、〔榎葉井事〕の後半の自讃話を記さずにはいられなかつた。長明の口吻は、はじめに自身の秀吟があり、それを俊成が先を越されたと悔しがり、その後息子の定家が同様の歌を詠じたのだ、というものであつた。「其後こそ冷泉中将定家の歌によまれて侍りしか」と長明から名指しされた定家は、内心穏やかではなかつたはずである。そうだとすれば、長明からあたかも模倣作であるかのごとく指摘された歌を、自歌合にわざわざ定家が自撰することなど、はたしてあり得ただろうか。

すでに述べたように、長明が嘘偽を記したとは思えず、定家には催馬楽「葛城」をもとに詠作された歌が存したことは確かであろう。しかし、その歌とは『定家卿自歌合』の三番左「古寺花」の歌ではなく、別な歌であったと思わざるを得ないのである。「古寺」という歌題は、新古今時代より急増しており、⁽²²⁾加えて長明以後、豊等寺を詠じた作例は確かに流行をみている。あるいは、後人による偽作がたまたま『無名抄』の記述と合致していたに過ぎなかっただけかも知れない。けれども、このようには考えられないか。『無名抄』には、鎌倉・南北朝に遡ると目される古写本も複数伝存しており、⁽²³⁾成立後、時を経ず早い段階から流布していたと考えられる。そうであれば、該歌は『無名抄』の流布にともない、何者かが〔榎葉井事〕の記事を利用して定家真作を装うべく、「古寺花」と歌題まで似せ偽作に及んだのではないか。〔榎葉井事〕を念頭に該歌を読むと、あまりにも出来すぎの感があり、かえって後人のさかしらが勝った行為かと疑わしく思えてくるのである。樋口氏が『定家卿自歌合』の一首一首について「定家の歌に似せようとしており、なかなか巧緻である」(『群書解題』)と指摘されたことは、示唆的であると言わなければならない。

では、長明が指摘した定家真作の歌は何処へいったのか。自撰家集『拾遺愚草』正編三巻と員外一卷の中に催馬楽「葛城」をもとに詠作されたという歌は見出せない。憶測すれば、その歌は定家自身の手によって葬られたのではないか。俊成が『長秋詠藻』から歌林苑の影を抹殺していたことを思い合わせると、あり得るように思われるのである。

父俊成から伝えられた歌の道を、特に晩年の定家は家業として為家以下の子々孫々に永く伝えていこうと心胆を砕いていた。歌道家としての基を築いた俊成の失態を憚るところなく記し、歌林苑を追慕し好士的態度を称揚鼓吹する『無名抄』の内容は、定家を刺激したに違いない。『定家八代抄』『百人一首』といった秀歌撰から、公的な勅撰集である『新勅撰集』さらには子息為家の『続後撰集』に至るまで、長明の歌は一首も採られてはいなかった。後年の定家は、あた

かも歌人長明を和歌史から葬り去ろうとしているかのように感じられる。そうした背景には、『無名抄』をめぐる上述のような事情も微妙に影を落としていたのではないか。

後鳥羽院歌壇の一員となった長明は、初めて接する御所辺の新風に驚きながらも、それを我がものとすべく勉勵にとめていた。そのことは、例えば建仁元年八月十五夜の後鳥羽院主催の撰歌合に撰ばれた長明の詠歌を見ても、如実に感得することができる。

ながむればちちに物思ふ月にまた我が身ひとつの嶺の松風（十二番左・月前松風・二三）

まつしまやしほくむあまの秋の袖月は物思ふならひのみかは（二十一番左・海辺秋月・四一）

はつせ山かねのひびきにおどろげばすみける月の入方のそら（二十九番左・古寺残月・五七）

よもすがらひとりみやまのま木のはにくもるもすめる有明の月（三十五番左・深山暁月・六九）

四首という数字は通親の八首、院・良経・慈円らの七首に比べ決して多いとは言えず、歌人二十五名による五十番百首の撰歌合では平均をゆく歌数である。しかしながら、新風をよく消化した精進のあととは、これら佳作ぞろいの作品に歴然と顕われている。四首はそれぞれ小侍従・讃岐・具親・定家の作と合わされ、いずれも勝をおさめていた。後に「はつせ山」を除く三首は『新古今集』に撰入されるが、「よもすがら」の歌については殊に院の覚えがめでたかったと『家長日記』は伝えている。長明と同数の四首撰ばれていた定家は、勝一負三という結果に終わっていた。定家は、少なくともこの撰歌合に限っては長明の力量を認めざるを得なかったであろう。直接対決で負けていることもさることながら、定家が『新古今集』への入集を進めた長明の歌三首のうち、「ながむれば」「まつしまや」の両歌はこの折に詠まれた作品であった。

『無名抄』の〔近代歌体事〕⁽²⁴⁾は、長明が歌林苑の会衆であつた清輔・頼政・俊恵・登蓮らのよみ口を高く評価し、自身をそこに連なる者と自覚しながら、新風の優れた点を察知し、後鳥羽院周辺の「今の世の体」にも鋭敏に感応していたことを伝えている。熱に浮かされたように新風に染まっていた長明であつたが、けれどもその時期は長くは続かなかつた。彼は『新古今集』の完成を待たずして和歌所を去つてゐる。それは、河合社の禰宜職に就くことができず、望みが叶わなかつた失意故の、直情的な行動とされている。しかし、はたしてそれだけが原因なのか、そのことはなお慎重に見きわめなければならない問題であらう。御所辺を退いた長明には、もはや歌人として帰るべきところはなかつたのである。

所引の和歌は特に断らない場合『新編国歌大観』によつたが、『無名抄』の文脈に則して取り上げたものに限り日本古典文学大系『歌論集 能楽論集』の本文を用いた。

注

- (1) 『明月記』による。『家長日記』では慈円を欠き十人。
- (2) 石田吉貞・佐津川修二氏『源家長日記全註解』(有精堂 昭四三)による。ただし本文は歴史的仮名遣いに改め清濁を付した。以下同。
- (3) 復刻日本古典文学館『無名抄(梅沢記念館蔵)』別冊解題(日本古典文学会 昭四九)
- (4) 拙稿「長明と寂蓮―『無名抄』から見た両者の関係―」(『銀杏鳥歌』13 平六・一二)。なお、これより先、久曾神昇氏が、寂蓮の家集と『無名抄』とに共通して見られる「中将の垣内」など名所旧跡の記述を手がかりに、二人の近い関係を推測されている(『顕昭・寂蓬』(三省堂 昭一七))。
- (5) 『無名抄』の本文は、日本古典文学大系『歌論集 能楽論集』による。なお、引用にあたり漢字は通行字体に改めた。以

下同。

- (6) 日本古典文学全集『歌論集』による。
- (7) 日本古典文学大系『古代歌謡集』による。
- (8) 天理図書館善本叢書『新古今和歌集鳥丸本』の複製による。以下同。
- (9) 日本歌学大系による。
- (10) 久保田淳氏『訳注藤原定家全歌集』(河出書房新社 昭六一)による。以下同。
- (11) 久保田氏は『鷹三百五十一首』については、「定家作とは考え難いと判断し省略」されている。
- (12) 上条彰次氏「長明『瀬見の小川』歌小考」(『和歌史研究会会報』六二・六四合併号 昭五二・五)。後に『中世和歌文学論叢』(和泉書院 平五)所収。
- (13) 山田洋嗣氏「古寺の情景―「秘」が伝えられる時―」(『日本文学』四四―七 平七・七)に考察があるが、俊成の発言をめぐっては、稿者はやや氏と解釈を異にする。
- (14) 東京大学国文学研究室蔵本、内閣文庫蔵本、二松学舎大学附属図書館竹清文庫蔵本、鳥原市立図書館松平文庫蔵本、中野幸一氏蔵本。
- (15) 「井四番歌合」(『定家卿消息』と合綴)。函架番号、〇九二・T。
- (16) 福田秀一氏「勅撰和歌集の成立過程―主として十三代集について―」(『成城学園五十周年記念論文集文学』昭四二・五)
- (17) 『訳注藤原定家全歌集 下』(河出書房新社 昭六一) 頭注。
- (18) 日本古典文学大系『歌論集 能楽論集』
- (19) 梁瀬一雄氏『無名抄全講』(加藤中道館 昭五五)
- (20) ただし、「夕されば」の歌については、定家は『定家八代抄』に採歌しているものの、俊成第一の秀歌とは必ずしも考えていなかったと見え、『近代秀歌』(初撰本・再撰本とも)や『詠歌大概(秀歌体大略)』に抜いたりしていないほか、『秀歌大体』にも撰び入っていない。上条彰次氏「俊成―人間俊成の克服・定家の目」(『国文学』昭五六・一二、後に注(12)書所収)参照。
- (21) 『新古今歌人の研究』(東京大学出版会 昭三八) 三三四頁。

(22) 『平安和歌歌題索引』（瞿麦会 昭六一）参照。

(23) 梅沢記念館蔵伝鴨長明自筆本、天理図書館蔵呉文柄氏旧蔵本、同竹柏園旧蔵本。このほか蓬左文庫蔵本が室町期の書写とされている。

(24) 同章段は、晩年の長明が鎌倉に下向し実朝と面談した折の講義ノートが原型かと言われてきたが、そうではなからう。後鳥羽院歌壇の初期の執筆であるという田中裕氏の御説に従うべきかと思われる（『無名抄「近代歌体」の問題』（『南山国文』9 昭六〇・三）参照）。

〔付記〕 貴重な御函書の閲覧を御許可賜った二松学舎大学附属図書館、並びに職員の皆様に厚く御礼申し上げます。